

ビワ生育情報（第1報）

令和2年10月
千葉県農林水産部

花房発現期は品種によりばらついており、「楠」は平年並、「大房」は平年より遅く、「田中」は平年より早い。
花房数はどの品種も平年より多い傾向である。

1 令和2年7～9月の気象

令和2年7～9月の気象を表1に示した。7月の月平均気温は23.9℃で、平年より0.5℃低く、前年より0.4℃高かった。降水量の月合計は405mmで、平年の209%、前年の139%と非常に多かった。日照時間の月合計は76時間で平年の45%、前年の72%であり非常に短かった。関東甲信地方の梅雨明けは8月1日ごろで、平年より11日、前年より8日遅かった。

8月の月平均気温は27.2℃で、平年より1.2℃、前年より0.1℃高かった。降水量の月合計は16mmで、平年の11%、前年の22%と極端に少なかった。日照時間の月合計は303時間で平年の140%、前年の132%であった。

9月の月平均気温は23.9℃で、平年より1.2℃高く、前年より0.5℃低かった。降水量の月合計は161mmで、平年の64%、前年の50%であった。日照時間の月合計は137時間で平年の94%、前年の71%であった。

表1 令和2年7～9月の気象(暖地園芸研究所)

月	半旬	平均気温 (℃)			降水量 (mm)			日照時間 (hr)		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
7	1	23.8	22.7	22.5	69	37	109	14	21	5
	2	24.6	23.3	20.2	70	44	37	8	23	13
	3	22.9	24.4	21.3	80	38	82	12	25	6
	4	22.1	24.7	23.7	156	23	23	13	28	10
	5	25.1	25.1	25.5	9	25	3	10	32	21
	6	24.8	25.8	27.0	23	27	38	19	42	49
平均/計		23.9	24.4	23.5	405	194	291	76	169	105
8	1	25.7	26.0	27.6	0	21	0	46	36	54
	2	27.5	26.1	27.7	0	27	0	52	36	58
	3	28.4	26.2	28.0	0	25	25	58	35	34
	4	27.8	26.0	27.4	0	22	0	55	35	32
	5	26.2	25.9	26.1	8	19	3	40	35	21
	6	27.7	25.7	25.9	8	30	44	53	40	30
平均/計		27.2	26.0	27.1	16	144	72	303	217	229
9	1	27.2	24.9	26.2	34	26	0	33	30	46
	2	26.7	24.2	27.0	68	45	173	35	28	40
	3	24.6	23.5	24.4	14	30	10	18	25	19
	4	24.7	22.4	22.3	3	41	119	21	23	27
	5	20.4	21.4	23.8	33	50	10	6	21	25
	6	19.8	20.4	22.7	12	59	10	24	20	35
平均/計		23.9	22.7	24.4	161	250	321	137	145	191

表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

2 樹及び花房の発育

花房の発現期は表2に示した。「楠」は9月15日で、平年より1日、前年より11日早かった。「大房」は9月23日で、平年より4日遅く、前年より4日早かった。「田中」が9月9日で、平年より7日、前年より14日早かった。花房の発現は品種ごとにばらついているが、花房数はどの品種も平年より多い傾向である。

夏枝及び秋枝の発生は平年並で、樹の生育は順調である。

表2 花房発現期（暖地園芸研究所）

品種	本年 (月.日)	平年 (月.日)	前年 (月.日)
楠	9.15	9.16	9.26
大房	9.23	9.19	9.27
田中	9.9	9.16	9.23

平年：1990年～2019年の30年間の平均

3 台風による被害を受けた際の管理

10月1日現在、日本列島に上陸した台風はない。今後、台風被害を受け倒伏した場合、樹は起こし損傷の程度に応じて枝を切り詰める。起こせない場合は、管理しやすいように枝を整理する。根が地面に露出しているところは、覆土をして根の回復を図る。このときバーク堆肥と一緒に混ぜると、細根の再生が促され樹の回復が早い。根が白紋羽病に感染していた場合は、フロンサイドSCを使用 방법에従い灌注処理する。

4 11月の管理

11月中旬には主要品種の開花が始まる。10月から引き続き行っている摘房・摘蕾は開花前に終わらせたい。アブラムシの防除は摘房・摘蕾の終了後に行う。

(1) 摘房・摘蕾

11月から12月にかけて摘房・摘蕾を行う。摘房では最終的な着果房率（全ての枝に対して果房が着生する枝の割合）が50～60%になるように調整する。発育不良の花房や混み合った花房等を間引いて1樹内の花房数を調整する。

摘房を行うと、残した花房が充実するので、開花、結実及び幼果の初期生育が良好に進み、品質の揃った果実を生産することができる。また、余分な花房が少なくなるので、摘果作業が軽減される。

摘房と同時に摘蕾を行う。摘蕾では花房基部から3段目までの小花梗枝（花房の枝）の中から充実した2段を残して他をかき取り、花房内の花数を調整する。摘蕾は、残された蕾の充実を促すので、摘房と同様の効果がある。花房の長さが3～5cmに生長して、下部の2～3段の側花こうが分離した頃が作業しやすく、花房全体の開花期を著しく延長することができる。開花期が延長することによって寒害を回避しやすくなるので、この時期を逃さずに摘蕾を行う。

(2) アブラムシの防除

ビワに寄生するナシミドリオオアブラムシは緑色大型のアブラムシで、ビワの葉裏の主脈に沿って加害する。寄生された葉は紅(黄)葉し、次々と加害しながら繁殖していくので、短期間のうちに甚だしい落葉を見ることがある。また、排泄物はすす病を誘発するため、樹勢が著しく低下する場合もある。防除は発生状況を見て随時行う必要があるが、発生初期が効果的である。11月にはナシなどからアブラムシが移り、繁殖期に入るので、この時期の防除は重要である。防除に当たっては、農作物病害虫雑草防除指針に従って行う。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961】
※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>